

【 添付 まとめ 3 】

とっとりネット「とっとり弥生の王国の謎をさぐる」

鉄器文化の伝わった道 高尾浩司（鳥取県埋蔵文化財センター

<http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=32826>

「とっとり弥生の王国」の特徴を示すものの一つに全国屈指の出土量を誇る鉄器があります。今回は鉄器の伝わった道と山陰弥生社会に花開いた独自の鉄器文化について探ってみましょう。



### 鉄との出会い

鉄器は稲作とそれに伴うさまざまな農具と同じように、朝鮮半島から日本へ伝わりました。弥生時代初め、北部九州に伝わった鉄器はまだわずかで、ごく一部の人が手にできないものでした。やがて稲作文化が日本各地に定着したころ、中国が戦国時代をむかえ国内外が動乱した影響で、朝鮮半島製青銅器とともに中国製鉄器が日本に流入するようになりました。それらを独占した北部九州の有力者は、権威を表すものとして良質の管玉・勾玉を欲し、日本海を渡り山陰や北陸と交易を行ったようです。潟湖に接した海辺のムラ・青谷上寺地遺跡は、その交易ルート上に位置する重要な寄港地だったのでしょう。

山陰・北陸地方で最も古い中国製鉄器（写真①、約2300年前）は、そうした背景のもとで獲得されたと考えられます。いち早く鉄に触れた青谷上寺地の人々はその効用に感嘆し、ものづくりの有効な道具として強く意識するようになったと思われる。



写真① 山陰最古級の鉄器  
(鑄造鉄斧破片・青谷上寺地遺跡)

### 中国製鉄斧の入手と使用

日本に伝わった初期の鉄器は中国製で、溶かした鉄を鑄型に流し込んで造った鑄造の斧がほとんどでした。それらは木を伐採するのに絶大な威力を発揮しました。また、たとえ割れて破片になってしまっても、一辺を砥石で磨き刃をつけ、ノミや小型の斧として再利用されました（写真②）。

こうした工夫は弥生時代の石器にもみられるもので、倭人が考え出したリサイクル方法といえます。鑄造された鉄斧は炭素をたくさん含むために堅い反面、衝撃に弱くて壊れやすい特徴があり、これを補うために表面の炭素を減らして柔軟性を持たせる”脱炭処理を施していました。青谷上寺地遺跡の鑄造鉄斧を分析したところ、やはり表面に脱炭処理を施した痕跡がみられました（写真③）。初期の鉄器使用を可能にしたのは先進地・中国の高度な技術と倭人の知恵だったのです。



写真② 鑄造鉄斧と破片の  
再利用品(青谷上寺地遺跡)



写真③ 鑄造鉄斧の断面  
(銀色に輝く鉄の周囲にみられる黒灰色の膜状の部分が脱炭層・青谷上寺地遺跡)

### 二つの交易ルート

破片となった鑄造鉄斧を再利用するかたわら、約2000年前には青谷上寺地遺跡で鉄器が製作され始めました。あらかじめ用意された棒状・板状の鉄素材を炉で熱して軟らかくし、打ち延ばしたり、切ったり曲げたりする鍛造という方法で小型の斧などを製作したようです。弥生時代の鍛造用鉄素材は中国あるいは朝鮮半島で造られたもので、鑄造鉄斧も含め日本海を通じた北部九州との交易によって入手したほか、石器石材とともに瀬戸内地方からも入手していたようです。青谷上寺地遺跡の朝鮮半島製板状鉄斧（写真④）とよく似た鉄斧が、伯耆町・永山馬籠遺跡など山間部を抜ける交通の要衝にある集落遺跡でも出土しており、当時は鉄を入手する2つの交易ルートがあったと考えられます。



写真④ 朝鮮半島製鉄斧  
(青谷上寺地遺跡)

## 山陰弥生社会と独自の鉄器文化

少し遅れて、丘陵上に集落を営む妻木晩田遺跡でも鉄器を製作するようになります。交易で得た外国産素材から作られた地元製品と、九州から運ばれた製品、そして少数の外国製品という鉄器の組み合わせは青谷上寺地遺跡も同じで、両集落が最盛期を迎える頃(約1800年前)には、他に例を見ないほど多数の鉄器を保有するまでになります(写真⑤)。同じ頃、朝鮮半島で鉄器の生産がさらに活発となって倭国内での鉄器の流通量が増え、鉄の効用が広く知られるようになったことで、木製農工具の多くに鉄製の刃が付けられました。その結果、日本海沿岸ルートでの交易の比重が大きくなり、山陰は周辺地域との関わりを深めていきました。特に北陸は鉄と交換する玉材の産地であり、高杯に代表される木製容器や鉄器・玉の製作技術に共通点が見られることから、強いつながりがあったことがうかがえます。当時のリーダーには次第に高まる鉄の需要を満たすだけの供給量を確保することが求められましたが、北部九州を窓口とする交易だけでは十分な量は賅えなかったことでしょう。

そのため、北部九州を仲介しない朝鮮半島との交易を試み、鉄器を獲得しようとしたと考えられます。青谷上寺地遺跡の大型鉄斧(写真④上)や妻木晩田遺跡の踏み鋤(土堀具)など、北部九州でも出土していない朝鮮半島製鉄器がみられ、大刀などの大型武器が日本海沿岸地域の王墓に副葬されることも朝鮮半島との交易を示しているのではないのでしょうか。「とっとり弥生の王国」には潟湖という天然の良港が点在し、それを最大限に活かした交易が独自の鉄器文化を生み出していたのです。



写真⑤ 鉄製農工具(妻木晩田遺跡)



青谷上寺地遺跡復元鉄器  
(愛媛大学・村上恭通教授製作)

[とっとりネット「とっとり弥生の王国の謎をさぐる」](http://www.tottori-net.jp/dd.aspx?menuid=32826)

<http://www.tottori-net.jp/dd.aspx?menuid=32826>

文=高尾浩司(鳥取県埋蔵文化財センター)